下町文化

SPORTS & SUPPORTS
KOTO City In TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区
NO. 305
2024.5.29

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
https://www.city.koto.lg.jp/

区指定有形文化財（建造物）

「旧渋沢家住宅」が潮見に移築復原!!

令和5年度、江東区教育委員会は、区文化財保護審議会（会長:佐々木正直・群馬県立館林美術館特別館長）の答申を受け、指定1件の内容変更を行い、また登録1件を解除しました。この結果、登録文化財は1,056件となりました。

指定の内容変更は、「旧渋沢家住宅」の竣工にともない名称と所在地を改めたものです（詳細は次頁）。

南側から見た「旧渋沢家住宅」の外観（下図は立面図）

※写真・図は清水建設株式会社提供

○区指定有形文化財（建造物）
「旧渋沢家住宅」が潮見に移築復原!!
○区内に残る震災の供養塔・復興記念碑
○資料紹介
昭和5年の大島町域の地図
○新刊案内
『絵葉書で見る江東百景
復興小学校－関東大震災－』
○渋沢栄一の深川福住町転居
○古写真の中の江東
木場・繁栄稲荷神社界隈

今年7月に改刷される新一万円札の肖像に選ばれた渋沢栄一ゆかりの「旧渋沢家住宅」が、潮見の地に移築復原されました。

栄一が、深川福住町（現永代2―37）に転居したのは明治9年（1876）8月のことで、栄一や子の篤二、孫の敬三らがここで暮らしました。同41年に三田綱町（現港区）に移った「旧渋沢家住宅」は、平成3年（1991）には青森県六戸町に移築され、このたびの移築復原でゆかりのある江東区に里帰りをしたことになります。

ところで、「旧渋沢家住宅」をはじめ文化財はなぜ残されてきたのでしょうか。そして文化財は私たちにとってどのような意味を持つのでしょうか。

文化財には、つくられた当時の思いと共に今日まで守り伝えてきた人々の思いが込められています。「旧渋沢家住宅」が、明治から令和にいたる140余年もの間、守り伝えられてきたことには、先人の並々ならぬ思いがあったことでしょう。その思いが、私たちの歴史文化をつむいできたのであり、文化財はその拠り所であると言えます。

文化財を広くみなさんに知っていただくことは、新しい世代へ文化財を伝え、そして私たちの歴史文化をつないでいく大切なことと思います。

指定内容変更

【有形文化財（建造物）】旧渋沢家住宅

潮見2―8―20

旧渋沢家住宅は、明治から昭和にかけて渋沢栄一とその家族が暮らした住宅です。令和2年（2020）1月に江東区指定有形文化財（建造物）となった「旧渋沢家住宅（部材）」は、部材の状態で保管されていました（本誌289号参照）が、同5年7月に潮見への移築復原が完了しました。その後、江東区文化財保護審議会の審議を経て文化財名称を「旧渋沢家住宅」に、また所在地を潮見に改めました。

復原にあたり、時代設定を住宅が三田綱町にあった昭和5年（1930）とし、当時の意匠・構造・仕様に基づいて復原を行いました。後年の部材の取り替えや資料などの不足により当時の状態に復原できない部分は、現状維持としました。

旧渋沢家住宅は、和風と洋風とを巧みに調和させた設計と施工技術および意匠・用材の優秀さ、昭和初期に建設された和洋館並列型住宅として完成された姿などが評価されて指定文化財となりましたので、その観点から住宅をご紹介します。

「表座敷」2階から見た黒柿の階段

住宅の中心として現在まで移築されてきた「表座敷」（明治11年竣工）の新築の際には、多忙な栄一に代わって妻の千代が、木材の選定などに優れた感性と審美眼を発揮しました。和風と洋風を融合させた「表座敷」の質実剛健なたたずまいや抑制的な洋風要素の採用などに、栄一と千代の美意識や価値観が反映されています。

また、昭和4～5年にかけて、栄一の孫敬三によって洋館が増築されました。洋館には、接客空間だけでなく家族団欒の場や厨房なども現存しており、洋風文化の浸透の中で洋風生活を積極的に取り入れた昭和初期の住宅の姿を現代に伝えています。洋館と「表座敷」を繋ぐのは、2階を洋間（寝室・書斎）、1階を和室（小供室）とする和洋折衷の建物で、屋根は入母屋桟瓦葺き、外壁は竪羽目の板張り仕上げに洋風の窓を付けています。

洋館1階　客間

洋館1階　食堂

南側外観（右から「表座敷」、和洋折衷の2階建、洋館）

和館と洋館を繋ぐ建物2階　寝室

住宅の南側は、和館・和洋折衷の2階建の建物・洋館の三つの棟がなだらかに連続する独特の外観意匠です。

※写真はすべて清水建設株式会社提供

登録解除

【有形民俗文化財】大黒天像

門前仲町1　明光教会

名称変更

【史跡】羅漢寺跡

大島3―1、4―5

文化財説明板の紹介

梅屋敷跡

浅草通り沿いに設置されていた説明板と標柱を、亀戸3―40地先に移設し、説明板の内容を改めました。

区内に残る震災の供養塔・復興記念碑

はじめに

昨年は関東大震災（以下、「震災」）から一〇〇年の年に当たることから、『下町文化』では、様々な視点から特集を組んで参りました。この中で、第３０１号では供養塔を取り上げましたが、区内にはこの他にも震災に関する石碑が残存します。

このことから、今号では富岡八幡宮（富岡１）の「復興記念碑」（区登録文化財）と持宝院（北砂４）の「震災供養塔」を取り上げていきます。

「復興記念碑」

同碑は、総高２９０㎝、幅１１０㎝、厚さ70㎝あり、正面には「復興記念碑」（写真１）、背面には「昭和十一年十二月」（１９３６）と陰刻されています（写真２）。背面には、他にも碑文が刻まれており、同社や氏子、周辺地域の被災状況、さらには、震災復興の状況について窺い知ることができる点で貴重な資料と言えます。

写真1 復興記念碑（正面）

碑文内容によると、同社は、関東大震災により甚大な被害を蒙り、「本殿及附属建造物悉皆炎上烏有に帰す唯纔に災を免れたるは七渡社及絵馬舎のみなり」と、本殿は焼け落ち、わずかに七渡社と絵馬舎を除き灰燼に帰したことが分かります。また、「数万の氏子も同様住居全焼して困難の極に在る」と、同社の氏子の多くが罹災し住居を失ったことが記されています。

写真2 復興記念碑（背面）

なお、ご神体は「一時御避難所大久保百人町稜威会神殿」と、大久保百人町（現新宿区）に一時避難をしていたため焼失を免れていました。このため、氏子総代、町総代委員等を中心として寄付を募り同社の再建を進めました。

再建工事は、昭和２年（１９２７）から始まり、同５年（１９３０）には本殿が完成し遷座祭が挙行されました。さらに、同８年（１９３３）には、儀式殿・社務所・舞殿・手水舎が落成し、次いで神庫・合末社も建てられ、ここに同社の建物はすべて再建されるに至りました。その総額は「七拾五萬円」（現在の価格で約７億５千万円）であったと刻まれています。

記念碑には、再建に携わった多数の人名が刻まれています。まず当時宮司職にあった富岡宣永（１８７０～１９４９）の名が刻まれています。宣永は、明治28年から昭和24年まで宮司を務める一方、諸芸能にも通じていたといわれています（松木伸也『富岡八幡宮の御創建と深川八幡祭り』、２０２２年）。

さらに、この中で経歴が分かる氏子総代は、公民学務委員長、深川区青年団長、帝国在郷軍人会深川区分会理事などを歴任した関口安五郎、東京府会議員、深川区会議員を務めてきた五木田治郎吉、深川区会議長山口清次、また、前氏子総代では、山平木工場を所有していた加藤平次郎、帝国在郷軍人会深川区分会第五班長、潮浜木工場を所有した笠原小十郎ですが、詳細は不明です（参考『江東区史』、『江東区における選挙のあゆみ』、『櫻東新聞』）。

震災供養塔

持宝院には、総高87㎝、幅41㎝の墓石型の供養塔があります。この供養塔については、その存在とともに不明な点が多くあります。

供養塔の正面には「大正十二年 大震災遭難者諸□（欠損）□」、背面には「大正十四年五月 川口三五郎建之」（写真３）と陰刻されており、震災から２年後（１９２５）に川口三五郎なる人物によって、震災で「遭難」した人々を追悼供養する目的から建立されたことが分かります。

写真3 震災供養塔（背面）

建立者の川口三五郎の詳細については不明ですが、持宝院前住職の板橋賢英氏によると、同院の「過去帳」にその名が記載されており、檀家であったことが分かります。

おわりに

第３０１号に引き続き、区内に残存する震災に関する石碑を取り上げてきました。これらは約一世紀前に建造されたものですが、被災の生々しさやこれを乗り越えていこうとする当時の人々の強い意志が伝わってきます。

※現在、富岡八幡宮は境内整備を行っており、今後、復興記念碑は同社境内の他の場所に移設予定です。

（文化財専門員　大関直人）

資料紹介

昭和5年の大島町域の地図

今回、令和4年度に寄贈された地図「最新大島町三丁目四丁目五丁目六丁目七丁目八丁目建物全図」（以下、「建物全図」／写真1）をご紹介します。本図は、建築士であった寄贈者の祖父（当時、大島町7丁目在住）が自ら製作し、手書きの原版をもとに印刷したものです（4色刷／昭和5年（1930）8月15日発行／大島町役場・砂町警察署後援）。現在は巻子装ですが、折り目が確認できます。寄贈者によれば、昭和19～20年の空襲の際に、折り畳んだ状態で屋外に持ち出したそうで、それ以来家宝として大事にしてきたとのことです。

写真1「最新大島町 三丁目四丁目五丁目六丁目七丁目八丁目 建物全図」

写真2「大島町之概要」

「建物全図」の概要について

「建物全図」自体は縦76・8×横107・2cmを数えます。上段に南葛飾郡大島町のうち羅漢通り（現明治通り）より東にあたる3～8丁目（現大島3～9丁目）の地図、下段に協賛者欄（個人15、商店36、工場7、建設関係13、病院4、薬局4、宗教施設1の計80）と発行者欄が印刷され、発行者欄には売価（「定価金五拾銭」）が書き込まれています。協賛者欄には、和洋菓子店や三つ玉撞球場（ビリヤード場）など域外である大島町1丁目所在のものが含まれており、対応する地図の左端にも表記が見えます。

地図中の右下（南東）の空白域には「大島町之概要」（昭和4年12月現在）と題し、歴代町長11代の一覧（氏名および在職年度・年数）と丁ごとの「戸数・人口並ニ其男女別」の一覧が書き込まれています（写真2）。

「建物全図」から分かること

地図を見ると多くの情報を得ることができますが、筆者が着目する3点について触れてみます。

【渡船場】

大島町8丁目161・175地先（南）の小名木川に帆掛け船の絵が描かれ、その右に「渡船場」の表記があります（写真3）。これは、草屋の渡し（区登録史跡）を指しており、現在の大島8丁目39から対岸の東砂2丁目13を結び、昭和10年代まで存続していました。

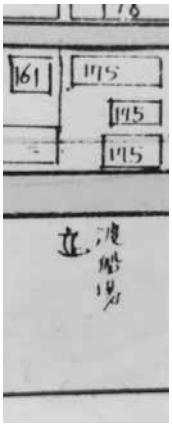

写真3「渡船場」

【牧場】

「牧場」および「牛舎」の文字を抽出すると計15軒が確認できます（表）。

大島町3～8丁目域の牧場に関しての資料としては、大正8年（1919）時点の「東京牛乳畜産組合員名簿」（雪印メグミルク株式会社所蔵※）があります。同名簿の「江東支部」（亀戸町・大島町・深川区猿江）には37軒中16軒（大島町2丁目の10軒を除く）が記載されており、そのうち、4軒（長島・杉山・上代・（斉藤））が本地図記載のものと一致します（写真4）。また、『職業別電話名簿　東京之部』（日本商工通信社、昭和5年）の「牛乳搾取及販売業」の項目には6軒が掲載されていますが、2軒（上代・有坂）以外は記

載が無いことから、本地図は牧場すべてを網羅していないと推定されます。

上代牧場についてですが、『大島町誌』（昭和7年）掲載の「本町名誉職略歴」に町会議員を務めた上代芳太郎氏（1885～1969）の項目があり、「（明治）三十九年大島町六丁目ニ牧場業ヲ経営」と見えます。同牧場は、昭和11年に千葉県千葉郡大和田町（現八千代市大和田新田）に移転し、昭和55年頃まで存続しました。ちなみに、砂町の高橋牧場や秋葉牧場（現秋葉牧場ホールディングス）も同じ頃に同地に転入しています。

※『ミルク色の残像―東京の牧場展―』（豊島区立郷土資料館、平成2年）掲載の表を参照。

表　「建物全図」記載の牧場一覧

地図の表記	住所		備考
	昭和5年時	現在	
牛舎	大島町3-361	大島3-22	
長島牧場	大島町3-439	大島3-17	「名簿」記載の長島牧場（3-443）と同一
杉山牧場	大島町6-83	大島3-26	「名簿」記載
上代牧場	大島町6-84	大島3-26	「名簿」「電話名簿」記載
牧場	大島町6-630	大島6-23	「名簿」記載の斉藤牧場か?
牧場	大島町7-360	大島7-27	
牧場	大島町7-366	大島7-27	
平野牧場・牛舎	大島町7-418	大島7-38	
奥山牧場・牛舎	大島町7-418	大島7-38	
有坂牧場・牛舎	大島町7-421	大島7-38	「電話名簿」記載
牧場	大島町7-484	大島7-37	
牛舎	大島町7-488?	大島7-38	
牧場	大島町8-569	大島8-22	
羽沢牧場	大島町8-700	大島8-33	
牧場	大島町8-705	大島8-33	

※備考にある「名簿」は「東京牛乳畜産組合員名簿」（大正8年）を、「電話名簿」は「職業別電話名簿　東京之部」（昭和5年）を示す。

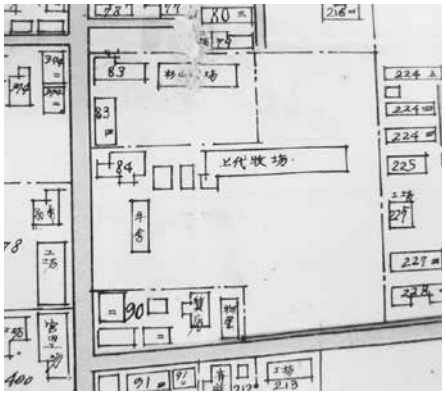

写真4 大島町6丁目にあった上代・杉山牧場

【計画道路】

基本の地図のうえに、南北2本、東西2本の細い実線が書き込まれています。所々に「東京府計画ノモノ」（写真5）と注記されていることから、東京府による計画道路と分かります。南北道路（東）と東西道路（南）は着工されませんでしたが、南北道路（西）と東西道路（北）はほぼ計画通りに敷設（もしくは拡幅）されました。

写真5「東京府計画ノモノ」の表記
※現丸八通り

東西道路（北）は現在の新大橋通りにあたり、その道筋は、戦後の町丁界の再設定により、現大島3・6・7丁目と同4・5・8丁目との境となりました。南北道路（西）は現在の丸八通りにあたり、小名木川に架かる丸八橋から北上するルートですが、北（竪川）側は現在よりも東側に設定されています。丸八橋の北辺り（写真6）を見ると、現在大島稲荷神社の北にある勝智院はもともと同橋の下辺りにあるなど、区画整理前の範囲や建物の配置などがよく分かります。

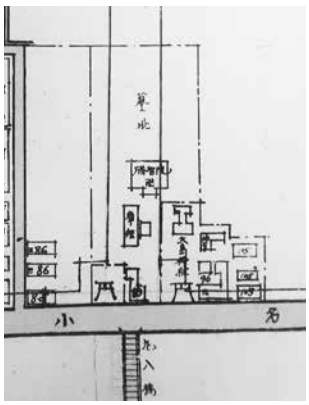
写真6 現丸八通り敷設以前の丸八橋北辺りの区画

計画路線が書き込まれている事例は、後に発行された「城東区詳細図」（日本統制地図、昭和16年）などの広域地図にも見えますが、本地図からは計画地域のより詳細な区画整理前（戦前）の状況を知ることができると言えます。

＊　＊　＊

本資料は、平成26・29年度に寄贈された、第2・5・8代大島町長富野喜平次氏関係の資料（本誌No.272―P3参照）とともに、近代の大島地域の歴史の一端を窺い知ることができる貴重な資料であると言えます。

（文化財主任専門員　野本賢二）

―新刊案内―

『絵葉書で見る江東百景　復興小学校―関東大震災―』

本書は、教育委員会で収集した戦前の絵葉書を通して、本区の近代の景観を知っていただくシリーズの第6集です。今回は大正12年9月の関東大震災からの復興にともない、鉄筋コンクリート造の校舎が建てられた旧深川区域の小学校15校に関する絵葉書を取り上げます（大富・深川・東川・東陽・平久・扇橋・元加賀・数矢・八名川・川南・猿江・明川。臨海・明治・明治第二は写真資料）。

【頒布場所】文化観光課文化財係（区役所4階）、こうとう情報ステーション（同2階）、深川江戸資料館（白河1―3―28）、芭蕉記念館（常盤1―6―3）、中川船番所資料館（大島9―1―15）、深川東京モダン館（門前仲町1―19―15）

【問合せ】文化観光課文化財係　TEL（3647）9819

A4判　40頁　価格500円

渋沢栄一の 深川福住町転居

明治9年（1876）8月26日、渋沢栄一は日本橋兜町2番地から深川福住町4番地に住居を移したとされています。これは『渋沢栄一伝記資料』（以降、『伝記資料』と表記）に記載された日時によるものですが、栄一が新たな拠点として深川を選んだ理由は何故なのでしょうか。ここでは、栄一の深川移転の経緯とその動機について考えてみたいと思います。

深川福住町（現永代2・福住1）は、隅田川東岸の佐賀町の東側に位置し、四方を堀割に囲まれた地域です。西側の堀割（現大島川西支川）を挟んだ佐賀町一帯は町人の蔵などが建ち並んでおり、深川福住町の西側も同様に蔵が建ち並んでいたと思われます。川に面して河岸が設置され、萬徳院や因速寺（関東大震災後に砂町へ移転）があるものの、深川の物流拠点の一翼を担っていたといえるでしょう。

この地域の土地所有者については、明治6年（1873）に東京府地券課で作成した第六大区沽券地図（東京都公文書館所蔵）で確認することができます。深川福住町の部分だけを抜き出したものが【図1】、そこに表記されている所有者と面積、地価をまとめたものが【表1】となります。のちに栄一が転居する4番地は、「飯島喜右衛門」（喜左衛門、誤記したものと思われる）の所有となっており、この「喜右衛門（喜左衛門も含む）」名義は、8・9・15・23番地となっています。また福住町西側の堀割（現大島川西支川）に面した1~7番地の所有者については、小栗兆兵衛（1）、三井元之助（2）・治郎右衛門（3）、小出三右衛門（5）、佐藤安五郎（6）、大村チカ（7）とあり、三井家の一族をはじめ、小栗（神田の大地主）や大村（京橋の船具商）といった資産家の名前が並んでいます。

飯島喜左衛門も江戸・東京きっての資産家でしたが、家業がうまくまわらずに没落しました（詳しくは拙稿「深川の豪商飯島喜左衛門」『下町文化』303号を参照のこと）。栄一は、この喜左衛門の邸宅を購入したのです。

栄一が深川福住町に移転する経緯については、『伝記資料』29巻に収録されている秘書芝崎確次郎の「日記簿」に見ることができます。

まず、明治9年4月16日、栄一は「湯島先生」なる人物とともに元飯島喜左衛門屋敷を再見分したとあります。当時、湯島に住んでおり、「先生」と呼称される関係性から、この人物は渋沢喜作ではないかと考えられます。

翌17日、栄一は清水喜助らに、建物の修繕の度合いについて調査するよう指示した上で18日に地主北岡文兵衛から一万五百四十円で購入しました。その際に「土蔵守」「屋敷守」と呼ばれ

【図1】深川福住町の地籍
（明治6(1873)「第六大区沽券地図」
東京都公文書館デジタルアーカイブ）より作成した。
※図中の丸数字は地番である。

る管理者がいたようですが、引き続きその仕事を任されたようです。そして、21日の日記簿には「本朝未明ニ転宅披露、稲荷河岸より小船壱艘ニテ、家財深川江引移し候事」とあり、日本橋兜町対岸の稲荷河岸から家財道具を深川福住町へ運んだことがわかります。

その後、12月20日には福住町9番地の家作を980円で、明治11年4月23日には福住町7番地の土蔵1棟・住宅を「今津や後家」から960円、大村五左衛門から2440円で購入したことが、「渋沢家文書」（『伝記資料』29巻）に記録されています。

このようにして、日本橋兜町の第一国立銀行の一角の住まいから、豪商の旧邸宅へ移り住んだわけですが、その理由について考えてみたいと思います。

渋沢史料館の桑原功一さんが「明治初期における渋沢栄一と産業振興」（『武蔵野』354号　2015年）の中で、深川福住町に屋敷を取得したことについて言及されています。それによれば、抄紙会社（現王子ホールディングス）で製紙の原料となる破布の保管場所として、明治7年頃から深川の貸蔵を使用し始めたことから、工場のある王子とは隅田川を通じてつながっていることを移転の要因として挙げられています。抄紙会社は、栄一が直接関係を持った実業の一つであり、彼の事業にとっても大きな意味を持つものでありました。

製紙原料の保管場所が深川に移った明治7年は、渋沢商店が創業した年でもあります。これは、従兄弟の喜作が栄一の助言を受けて設立した会社で、横浜の拠点では生糸、深川の拠点では米穀を取り扱うものでした。『伝記資料』15巻によれば、会社の創立は明治7年のこととされておりますが、具体的な活動については分からないところです。深川での米取引については、佐賀町一帯の貸蔵を活用していたことが想像されます。

喜作の実業については、栄一が何度も助言だけでなく、資金援助などを行っていました。喜作が明治14年に米相場で失敗した際には栄一が弁済し、同20年には銀相場で失敗した時には、喜作を実業から隠居させ、長男の作太郎を相続させることで負債整理などを行います。従兄弟であり、いわば同志でもある喜作の事業には栄一も関心を寄せていたことと考えられます。前述した通り、旧飯島喜左衛門邸の見分に「湯島先生」こと喜作を同道させたのは、米穀の倉庫として活用することを前提としていたと考えられます。

このように政府を辞し、実業で身を立てようとした栄一にとって、深川福住町の地は、まさしく実業家として「はじまりの地」であったといえるのではないでしょうか。

（深川東京モダン館管理事務所
副所長　龍澤　潤）

【表1】深川福住町の土地所有者

地番	坪数	金額	所有者
1	226.260	¥400	小栗兆兵衛
2	98.781	¥125	三井元之助
3	325.220	¥300	三井治郎右衛門
4	200.386	¥450	飯島喜右衛門
5	98.960	¥500	小出三右衛門
6	298.256	¥450	佐藤安五郎
7	334.723	¥400	大村チカ
8	198.330	¥400	飯島喜右衛門
9	290.625	¥500	飯島喜右衛門
10	112.776	¥180	古市傳兵衛
11	84.940	¥120	古市傳兵衛
12	75.233	¥150	高橋栄次郎
13	200.000	¥120	高橋栄次郎
14	657.100	¥715	会議所持
15	141.648	¥380	飯島喜左衛門
16			萬徳院
17	89.680	¥140	紫村三蔵
18	135.630	¥100	加藤茂兵衛
19	24.650	¥20	長谷川太助
20			因速寺
21	205.845	¥400	井口タツ
22	220.630	¥220	井口タツ
23	6■.467	¥270	飯島喜左衛門
24	105.600	¥300	加藤ツ子
25	262.787	¥450	望月権平
26	1,078.700	¥1,000	飯島喜右衛門

※明治6(1873)「第六大区沽券地図」(東京都公文書館デジタルアーカイブ)より作成した。■は史料欠損のため不明。

古写真の中の江東
木場・繁栄稲荷神社界隈

近代の江東区における時代の移り変わりを知る資料として、古写真があります。江東区教育委員会所蔵の古写真には、『江東区史』（江東区、昭和32年）編纂時に撮影されたものの他、区民の方や区外在住で元江東区域の住民（ご子孫）の方からご寄贈いただいたものがあります（主に昭和30～50年代）。

今回、平成25年度に寄贈された繁栄稲荷神社（木場2―18―12）界隈の写真をご紹介します。

繁栄稲荷神社について

同社は呉服商・大丸の木場別邸（現木場3―18・19辺りの繁栄橋の西一帯）内に宝暦7年（1757）に創建と伝わります。安政4年（1857）頃建造と推定される本殿（区指定文化財）は、明治44年（1911）に根津嘉一郎邸（現港区青山6丁目の根津美術館敷地）に移築されます。昭和36年に大丸に返還された際に現在地付近に移築され、平成元年には付近一帯の整備工事に伴い再建されました（本誌No.265参照）。

昭和50年撮影当時と現在

写真1～3はいずれも、昭和50年2月22日に寄贈者によって撮影されたものです。写真1は神社を南から北方向、写真2は大島川東支川（現区立木場親水公園）の西岸（木場2―7）から北東方向、写真3は鶴寿橋（木場3―8・9辺り）から南方向を捉えています。いずれの写真にも写り込んでいる高架（橋脚）は、工事中の首都高速9号深川線（中央区箱崎・辰巳間）です。ちなみに同線は、昭和46年に着工し、同55年2月に開通しています。

写真1は鳥居2基（南から朱塗り・石造）および本殿は一直線に並んで南を向いていますが、現在は石造の鳥居1基（安政4年／区登録文化財）が敷地南東の場所に南向きに（写真5）、本殿は数メートル南に移動し東向きに建てられています（写真4・6）。

関東大震災と東京大空襲からの被災を免れた江戸時代の神社の移築、昭和50年前後に建設された高速道路、そして、材木が浮かぶ堀割（写真3）から親水公園（平成4年開園／写真7）へというように、この界隈は区内でも変化が著しい場所と古写真から言えます。

（文化財主任専門員　野本賢二）

写真1　繁栄稲荷神社（南から）

写真4　写真1の現在（南から）

写真5　現在の神社社頭（南から）
※本殿は鳥居をくぐって左（西）。

写真2　繁栄稲荷神社
（南西から）

写真6　写真2の現在（南西から）
※写真2で橋脚の北に見えていた本殿は、橋脚南（中央右手の緑の中）に移築された。

写真3　鶴寿橋から繁栄稲荷神社方面
（北から）

写真7　写真3の現在（北から）
※左（東）の建物は深川警察署。

図　撮影場所